



特別収録 養老孟司【インタビュー】

# 人間をノイズととらえる時代に 生きる子どもたち

「この本を読んだら、次は外へ出て、自然に親んでくださいね。(中略) 海や川や森も、結局は自分につながっているのです。いま自分の体を流れている血は、あっちの川やこっちの川から来た水ですからね。自然に親しんでいないと、なかなかそうは思えないのです」——解剖学者の養老孟司さんが序にそう書いている子どもたちに向けての本『森里川海大好き!』(環境省発行)に出会った。養老先生といえば、「虫採り」が大好きで、宮崎駿監督の美術館用短編「毛虫のポロ」も観て頂いたりしている。そんな養老先生が7人の編集委員の方と一緒に、自然と人間のかかわりを物語で綴った本を編集した。きっと現在の子どもたちの状況、あるいは日本の今について、いろいろ考えるところがあつてのことだろう。そう考えて、話を聞きにうかがった。

## ●ノイズのない、「情報としての私」が 必要とされる時代

編集部(以下——) 養老さんが『唯脳論』(ちくま文庫)を発表されてからそろそろ30年が経ちます。昨年11月には『遺言』(新潮新書)を出版されましたが、この間に養老さんの中で世界を見る目がどう変化したのかを、まずお聞きできたらと思います。

養老 今年出た本の中で一番変わっていたなと僕が思ったのは落合陽一さんの『デジタルネイチャー 生態系を為す汎神論化した計算機による侘と寂』という本なんです。『デジタルネイチャー』というタイトルを見た瞬間にまたこんなこと言ってると思って、それから考え込んだの。

デジタルとネイチャーってほしい真逆のものと思っちゃうでしょう。ところが、たとえば虫の写真で小松山賢二さん(慶応義塾大学名誉教授)が撮っているマイクロフォトコラージュという撮影法による不思議な写真がある。ひとつの虫を何十枚も撮って写真のピントの合ったところだけを重ねて最終的な像にしているんですよ。こんな写真は実際にないんだよね。普通のカメラで撮ったら焦点深度が浅いから拡大した場合、必ずどこかボケる。ところが小

松山さんの写真は虫のどの部位にもきちっとピントが合っているの、なんとも言えない奇妙な違和感がある。

これを20年ぐらい前に初めて見たとき、うまく言葉が見当たらなかったんですよ。どこにも嘘はないんだけど、現実にはそういうものはない。これ、なんて呼ぶんだろうとずっと考えていた。

——まさにデジタルネイチャーという言葉がしっくりきませんね。

養老 そうなんです。そこで「待てよ」と思ったのは、たとえばCT画像もそうなんです。CTって人間の身体を小さい立方体に分解して、その各部分のX線の透過度だけを測っている。本当は数字の羅列なんだけど、その数字の羅列を医者が見ても何もわからない。わからないから、わかるように写真のふりをしている。写真に再合成しているわけです。これもまた嘘かという、どこにも嘘はないんです。

——デジタル画像のデータが壊れて膨大な文字列に化けたとき、初めて正体を見たような気になる感覚と似ていますね。

養老 そうそう。だから今はいわゆる自然と人工物というものとの区別を考え直さなければいけない非常に不思議な時代になっている。デジタルとネイチャーがほんとにくっ

ついちやつているんです。本物が偽物かで済んでいた時代はハッピーで、今は何が本物で何が偽物かわからなくなつてきている。

——養老さんが『唯脳論』で書かれた世界がより顕在化してきた感じですね。

**養老** よく話すんですけど、5、6年前に銀行へ手続きに行ったんですね。そしたら顔見知りの銀行員が「先生、本人確認の書類をお持ちですか」って言うの。みなさん、運転免許を持つてるけど、私は持つてない。健康保険証でもいいですって言うけど、銀行に健康保険証なんて持つていないよな。そこで、銀行員がなんて言ったかと思ったら「困りましたね。わかつてはいるんですけどね」って言いやがった（笑）。

僕がまず驚いたのは、つまり銀行が欲しいのは「本人確認の書類」で「現物の俺」じゃねえんだなと。そこはわかつた。それはいいんですよ。だけど、じゃあ「現物の俺って何だ？」という疑問が起こつた。そうでしょう。本人確認の書類のほうが銀行としては必要なのであって、私という本人が必要なんじゃないんですよ。

——生身ではなく、記号としての養老孟司が必要だと。

**養老** うん。実はここ数年、それで悩んでいたの。で、あるとき、よくある話で、会社に勤めているヤツが「同じ部

**養老** こいつ（猫）を飼つてればよくわかりますよ。いちいち餌やらなきやいけない。部屋の中でうんこしやがって掃除しなきゃならない、そういうことになる。

——でもノイズは必要なんですよ。

**養老** 必要と言うか、世界は元来ノイズなんです。それを今はほとんどノイズを落としてデジタルネイチャーにしちゃつた。

——そのデジタルネイチャーの世界の中では「現物」が「情報」に還元され、その「情報」が「現物」の存在を排除しつつあるということですね。

**養老** そう。「情報」の大きな特徴というのは時間性がないうということ。つまり変化しない。これがいわゆる「現物」と違う。「現物」は時々刻々と変化します。

——老いる、腐る、壊れる。

**養老** そうです。人体で言うと、7年で骨を含めたあらゆる細胞が100%入れ替わる。僕なんか11回以上入れ替わっています（笑）。現代人が科学的、客観的、物質的であるなら、それを同じ人だというのは完全に詐欺でしょう。

——その場合、遺伝的な情報が受け継がれるというのはどう捉えればいいんですか。

**養老** システムつてそういうものでしょう。ジブリだつてどんどん人も入れ替わり、中身は変わつていく。だから常

屋で働いているのに若いのがメールで報告してきやがる」と言うわけ。同僚同士でも同じ部屋なのに顔を見ないでメールでやりとりしてる。あれは何だつて。それでようやく気がついた。われわれが「現物」と思つていたものは、そういう世界では何と呼ばれるかと言うと、「ノイズ」と呼ばれるんです。

ようするに銀行というシステムに必要なのは、ノイズのない「情報としての私」であり、生身の本人はノイズの集積だから排除される。

——現在の社会システムの中では、生身の人間こそが不純物だと。

**養老** それを一番極端に表したのがマイナンバーでしょう。おまえは番号1個でいいと国は言つていく。そこに付属する情報が付いていけば、本人はいらない。そういう世界に住んでいる若い人はノイズとつき合いたくないんですよ。だからメールで報告する。なぜかと言うと、現物はノイズが入つていくから。ノイズが入つてくると処理を誤る。上司に会つて二日酔いだつたりすると、機嫌から顔色まで含めて余計な情報がいっぱい入つてきて処理しきれない。そんなものは給料に入つてねえと、こういう話でしょう。

——その論理を当てはめると、若い子が二次元にハマる理由もわかる気がしますね。

に自分を模してつくつていくみたいなものだね。

——しかし、多くの人は自分という存在は変わらないと思つていきますよ。

**養老** うっかりすると、そこが混同されちゃうんです。その混同の一番大きい問題が「自分が存在する実在」であり、その自分是不変ではないということ。この間勉強して、びっくりしたんだけど、仏教には「無明」という言葉があるでしょう。「無明」というのは簡単にいえば「自己が実存する」という見解こそが人間の最大の妄想である」ということ。つまり変わらない自分なんてあなたの頭のなかにしかないとお釈迦様も言つていく。

——男女の喧嘩で「あなたつて変わつちやつたのね」というのがあります。変わつて当然だつたんですね。

**養老** だから、一時の気の迷い、なんかないんだよ（笑）。ただね、それは社会では認められない。なぜかと言つたら、そんなことを認めると、「昨日金を借りたのは俺じゃねえ」という理屈になる。

——だから一貫性をどこかで保証しなきゃいけない？

**養老** いや、むしろ現代社会というのは初めから一貫性のある「情報」でできているんですよ。「情報」というのはつまり変わらないものということ。だからこそ、そこでは「変わる実体」のほうが「ノイズ」となつて排除されるわけ。

—— やや頭が混乱してきました。「情報」というのはむしろこれまで日々変化して流れていくもので、だから誰もが一所懸命追いかけないと置いていかれるという感覚だったんですが、そうではなく変化しないものが「情報」なんです。養老 まったく固定しちゃっています。たとえば虫や植物、あるいは風景も刻々と変化する。けれど、それを写真に撮って情報化すれば固定されるでしょう。つまり、人間の頭の中を通ると時間が止まるんです。

——なるほど。情報は増えるけれど、変化はしない。

**養老** コンピュータの世界がまさにそれでしよう。あの中にあるものは時間的に変化しない。現代人がなぜコンピュータを作って、すべてを「情報」に変えていつちやうかと言うと、自分が変わっていつて死んじやうからですよ。だから人類は昔から絶対変わらないものを追いかけた。学問はそれを「真理」と言った。真理はいつになっても変わらない。文字をつくった瞬間に、そういうものができちゃったんです。たとえばピラミッドって、じいさん、親父、孫の三つの世代があるんですよ。じいさんのピラミッドが一番でかい。親父のが少し小さくなる。孫のはうんと小さくなる。ところが孫のピラミッドの中には文字が出てくる。

ピラミッドは時間と共に変わらないものの象徴なんです。なぜかと言うと、あの四角錐は完全に東西南北を指し

いうと、人はいらなくなると言う。

——確かにここ最近急に人間がAIに代替されちゃうというような話も出てきましたね。

**養老** もうすでにされているんだよ、そういう考え方の中では。だから結局、人の意識にとっては記号化されたものしか存在しない世界が理想的なんです。

——あくまで人間の「意識」にとつてということですね。

**養老** 人間の「意識」だけです。だから僕は『遺言。』という本の中で動物も人も意識を持っているけれど、人の意識だけが「同じ」という働きを獲得したことで人類社会が始まったと書いた。「同じ」というのは「変わらない」ということ。「花」という言葉が桜でも向日葵でも同じように通用するのは人間の意識が個々の花を記号化して「同じ」にしているからですよ。だから言葉が通じる。あるいはお金もそう。食物や商品を記号化して硬貨や紙幣と「同じ」にできる意識の働きがあるからお金というものが成立する。民主主義という概念もそう。動物の世界ならボス支配になるけれど、人間は平等だと考える。平等というのは個々の人間を「同じ」人間であると意識の中で記号化すること、だからその社会ではどんな人間も交換可能になる。——平等という言葉がぜんぜん違う嫌な意味を帯びて聞かえてきます(笑)。

ている。昔は東西南北というのは変わらないと思っただけです。だから北極星を見る穴が開いている。ピラミッドに斜めの穴があつて、その下の部屋に水盤がある。夜になると、当時の北極星がその穴を通して水面に映った。

——当時は地軸が変わるなんてことまで考えなかったわけですね。

**養老** そう。4000年経った今は北極星は映らない。でも、そのくらい意識して変わらないものを作ろうとしたんです。変わらないというのは死なないということですから。秦の始皇帝が求めた不老長寿の薬もそうです。彼もでかいもの、万里の長城をつくった。そういうものは、時間と共に変わっていかない。だから万里の長城は残っているし、兵馬備も残っている。しかもそのうえ彼は焚書坑儒によって本を焼いた。文字は変わらないものの象徴だからね。そんな手軽に不老長寿を手に入れられてたまるかって、たぶん怒ったんだと思う。

——物理的に不老不死を欲していたというより、移ろいゆくものの反動として、変わらないものを欲していたという本能に近いわけですね。

**養老** そう。不老不死を求める人間の意識は、そうしてコンピュータをつくることで、いわば理想の世界を手に入れたんです。手に入れたからこそ最近は何を言い始めたかかというんだから。

——まとめると、「当たり前前」を記号化することで「同じ」と誤解して生きているのが今の社会ということですね。

**養老** そうなんです。だから今のわれわれが生きている社会を表す言葉として「デジタルネイチャー」という言葉はしつくりくる。デジタル化という意味はまさに時間を止めて「同じ」にすることですからね。でも、それじゃあ全部嘘かという、必ずしも全部嘘ではないというところが難しい。どこまでが嘘で、どこまでがほんとかつて追求してみても、しょうがないわけ。

●意識(理性)と感性——人類が直面する大問題

——となると、排除された「当たり前前」はどこに行くんではないか?

**養老** それをわれわれがどのように受け取るかという、やつぱり「感覚」、さらに「感性」と言ってもいい。「感性」という言葉はうまく英語にならない言葉の一つで、感覚だ

けで捉えていったものに影響を受けている場合に「感性」という。これは気がつかない人は気がつかないですよ。だから多くの場合「何、これ？ ゴミじゃない？」という話になって終わりになる。

——感性という話に通じるかわかりませんが、優れたアニメーターと話していると圧倒的に「ものを見る力」が優れていることに気がつかれます。ひるがえって、今の社会では「ものを見る力」というものが欠けているんじゃないかと。

**養老** そうですよ。それは感性そのものです。「見る」ということを現代社会では受け身に考えるんですね。そうじゃないんですよ。見るとは、相手が「視線を感じる」とか「圧力を感じる」ようなもので、ほんとは相当エネルギーのいることなんです。現代人はそれがいやだから、受け身でいいようにテレビを流し続けたりスマホをいじっていたりするわけでしょう。でも、知覚って意外にアクティブなんですよね。

——宮崎駿監督にどういうふうにものを記憶しているのかという話を聞いたときに「視覚に頼らない」という話をしました。たとえばこの木を覚えておきたかったら、触ると。ようするにもう1個の感覚を付け足すということをやっています。

**養老** 僕がまさにその典型です。虫の標本を万単位で持つ

——連続性というのはノイズで埋まっているわけですね。

**養老** だから、生きているってそういうことなんです。「感覚」と「意識」というのは、これから先に人類が直面する大問題でしょうね。人が生きているということに直接関わっちゃうので。人が生きているのは理屈じゃないですから。けれど、記号の世界になると理屈になっちゃう。それでしみじみ思うんだけど、アメリカという社会が最近やっとなってきた気がする。

——どういうことでしょうか？

**養老** アメリカって不思議な世界でしょう。民主主義社会で、あれだけいろいろ根本的な理念を置いて、よその国にまで人権を無視しちゃいかんみたいなことを言って、じゃあ、おまえの国はどうなんだと言うと、1%の人が90%以上の富を独占している。なんで、ああいうことになるのかなと思って。

——それも「感覚」と「意識」の問題に関係している？

**養老** まず第一にいろいろな文化の背景の人が集まっていますから、どこまで行っても宥和しないんですね。モザイクなんです。アパートを例にとると、1階は全部ユダヤ人の商店なんだけど、2階は全部イタリア人の家族が住んでいるとか。つまり一番細かいところまで下がっていくと、相変わらずモザイク状態なんです。

ているでしょう。それぞれの標本についてなんで覚えていくかというところ、それを捕ったときの風景から標本にする過程までの運動がぜんぶ入っているからなんです。

——運動がくっつく記憶が深まる。

**養老** そうなんです。だからその対象に関する全体の記憶が出てくる。

——今の子どもは、結果の情報だけの記憶になっちゃってると。

**養老** そう。宮崎さんが描かれる絵にはそういう運動が絵の裏側に全部入っている。だから見る人間の感覚が揺り動かされるんです。というか、そもそも絵を描くって本来そういうことでしょう。僕も中学生のときに捕った虫の標本をまだ持っていますけど、そのときの風景から場所からちゃんと浮かんでくる。寒かったとかね。3月だよな、あれとか。

——ノイズですね。

**養老** そうなんです。ノイズを落とすと、記憶は何も残りませんよ。

——最近、物忘れが激しいのは記号しか頭に入れていないからかな(笑)。

**養老** 記号はすぐ忘れちゃいます。それは立体感がないんですよ。

——混ざり合っただけに見えるけど、分離しているわけですね。

**養老** そういうところで、連邦政府みたいなものをつくることも普通の議論ってどういう議論かなと考えると、もつとも普遍的な論理しか通らないんじゃないかと思つたわけ。祖先は大事だから家に仏壇や神棚を置きましょうという提案を連邦政府にしても、たぶん通らない。ローカルルールはダメなんです。ローカルルールがダメだということになると、徹底的な普遍的なルールしかない。それで社会をつくっていくと、まず盛んになるのはコンピュータのほうなんです。アメリカ人はフェアというのが好きだけど、コンピュータってまさにフェアで、あれは全然偏見がかかっていない。偏見がかかっていないコンピュータのデータを利用すると、彼らはフェアだと思っているわけです。

じゃあ、たとえばシカゴに若者が2人いて、IBMに入社したいと思ってる。片方は黒人街のスラム出身で、片方は山手出身であると。IBMが2人の応募を受け付けると、住所がわかった瞬間に今はビッグデータで、この人の住んでいる地域は交通事故に遭う確率はどのぐらい。平均寿命はどのぐらいと全部出てきちゃう。すると、最初の段階でたぶん100対60ぐらいの差が付いちゃうんですよ。ようするに、コンピュータを導人したことによって、あるいはコンピュータ型の客観性で判断することによって、現在の格

差はどんどん拡大する。現実的にそこで判断していったら、明らかに現状が拡大するしかない。だから見事に格差社会になる。つまりね、アメリカという国は自由であることを謳いながら、実はものすごく固定した社会になっている。——先ほどの話で言えば、いろいろな人種がモザイク状に入っているからこそ「同じ」にしようという意識の力がどの国よりも強固に働いている。

**養老** それしかないんですよ。民主主義ってそうでもない。みんなが納得する範囲しかないんです。その範囲はまさにコンピュータなんですよ。だからアメリカであれだけコンピュータが進んじやったんです。

——意識の力がどこよりもいびつに発達した国だから、その反動として突然学校でマシンガンをぶつ放したりする子が出てくる。

**養老** そうそう。だから逆に感情的なもの、エモーションナルなもの、完全にローカルだというふうになって、ローカルは勝手にしろと。勝手にすると、今度はあそこまで振りきれちゃうんですよ。

——最近ではイギリスがEUから独立したり、トランプが大統領になったりという状況が現れていますよね。要するにフェアを強要されて続けてきた社会の中において、アンフェアなものを実は求めているんじゃないかと思っただけですが。

遠くない時期にシンギュラリティ(技術的特異点)が起き、AIの進化が人間の先に行くというような話もあります。

**養老** いくつか本を読んでいて思うんだけど、最近では数学家の人はコンピュータの過大評価を指摘していますよね。まずアメリカだと例のリーマンショックの原因になったサブプライムローン考えたチームに参加していた数学者の女性。彼女はいかにビッグデータとか、そういうものがダメかということを個人のブログでずっと発信している。さらに今年の山本七平賞になりましたけど、新井紀子さんの『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』。あの本は非常におもしろかった。

——国立情報学研究所の社会共有知研究センター長の数学者の女性ですね。

**養老** うん、彼女が何をやってたかと言うと、東大入試を東大ロボくんというAIに受けさせた。ロボット、つまりAIって何ができるのかをもう少し具体的な局面でチェックしようと考えたんですね。

例文を読ませて、四択で例文に合うものを選べという単純な言語を使った論理なんですよ。その程度のロジックなら、コンピュータはだいたいできる。

それでね、彼女が試みた実験で、もう一つおもしろいの

**養老** 明らかにそうですよ。それはエリート層からすると、完全に逸脱しているわけですよ。だからあいつらはおかしいという話になる。

——でも、それは実は人間らしい自然な反動であるかもしれない。

**養老** つまり論理を詰めていったために人間という物差しが裸で表れてきちゃったんです。人間って「同じ」にしていく動物であるけれど、それだけじゃないということです。コンピュータは理性(意識)側だけを扱っているから、当然それだけに従ったらかおかしくなる。一番おかしいのは、コンピュータが世界を支配するようになって人間がいなくなるといいう考え自体がおかしい。俺、いつも言うんだけど、「コンセントを抜けばいいだろ。なに言ってるんだ、馬鹿野郎」って。そうすると何を言われるかと言えば「いや、先生、そのうちコンピュータが自分でコンセントを入れるようになります」って。そういうコンピュータをつくるのを犯罪って言うんだよって(笑)。

●現代社会のエリートというのは「a11b」を受け入れられる人

——いまはAI論争が盛んですよね。このまま行くとそう

は、同じものを子どもたちにやらせていたの。小学校から中学校、高校、大学生まで20何万人。すごいでしょ。この努力。

——すごいですね。

**養老** 非常におもしろいのは、彼女の言う「読解力」は中学生段階で見事に伸びるんです。中1、中2、中3と伸びていく。それはつまり論理能力。それで高校になったらどうなるかというと、もう伸びない。東大合格者数で御三家といわれている麻布高校とか灘高校とかそういうところは何かをしているかというところ、中学段階で読解力が最高度になった生徒を上手に入試で集めている。それだけ。べつに高校の教育がいいから東大に入っているわけじゃないんです。

——言わば、いい競走馬を集めているだけということですね。

**養老** そう(笑)。そうになると、中学生段階でいったい何が起ころんだらうという非常に大きな興味がある。中学で伸びるんなら、いったいどういふことと関係があるのか。「読解力」というのなら、たとえば読書時間が長かったら読解力は高いだろうと誰でも思う。ところが新井さんの見解では相関なし。

——ほう。

**養老** 明らかなのは、中学生の行動とはほとんど相関がと

れない。彼女自身は今のところ相関が見つかっていないと言っています。でも、僕はこれについて『遺言。』という本に書いているんですね。なにが起きるかといえば、中学生段階になると、まず方程式が気に入らない子が出てくる。初めて文字式を習うと、「 $2x \parallel 6$ だから、 $x \parallel 3$ でしょ」と先生が言う。そこはわかるんだけど、気に入らないんです。「 $x$ 」は「 $3$ 」じゃねえだろ。それこそ「 $x$ 」は文字だろ。「 $3$ 」は数字だろ。それをイコールにしているのかということになる。

——感覚としてはわかります。

**養老** まさにそこ。実はそこなんです。もう少し行くと、全部文字式になって「 $a \parallel b$ 」になる。「 $a \parallel b$ 」なら、「 $b$ 」という字は明日からいらねえだろ。「 $a$ 」って書けばいいということになる。

——それは確かに。

**養老** そうでしょ。そこが中学生が一番引つかかるところなんです。中学生になると、実はさつきあなたも「感覚としてはわかる」と言っただけど、まさに「感覚」を無視して、「イコール」を優先するということをしなきゃならない。——なるほど。ここで「同じ」にする意識が働き始めるわけですね。

**養老** そう。それを受け入れられるか、受け入れないかが、ま

**養老** それでさつきのコンピュータ、アメリカの話が見つかるでしょう。現代社会のエリートというのはわかる人なんです。

——「 $a \parallel b$ 」がわかる人。受け入れられる人なんです。**養老** 受け入れられるということは何をしてもいいということなんです。

——おまけにそれは実体としての生であるノイズをどんどん排除することにも頭が慣れてくる過程なわけですね。

**養老** ええ。非常に難しいところへ現代社会は来ているなと思います。僕はそれを見て「バカの壁」と言ったんですよ。だから中学生はどう思っているのかと言うと、わからないんじゃないんです。わかりたくない。わかっちゃるもんかという。それはできない子を教えていたら、よくわかるんだ。断固抵抗しているからね。

——じゃ、けっこう頑張っているんだ。

**養老** そうなの。頑張ってるわからなくしている。おもしろいのは四択の問題で20%ぐらいしか正解がないやつなんです。このへんになるとデタラメでつけたって25%ぐらい正解しなきゃおかしい。つまり、正解率が20%しかいかないということは逆を行ったわけですよ。

——それはおもしろい。

**養老** 非常におもしろいけど、深刻な問題ですよ。

子どもによって違ってくる。受け入れない奴はどういう奴かという、概念が優先して、それが美的感覚と結びついている。だから「 $a \parallel b$ 」は我慢ならない。だって違う字で作ったんだから、それを同じにするとは何事だと怒り出すんです。これって実は倫理感と結びついている。

——ああ、確かに。

**養老** 中学生ってそこが非常に大事なんです。社会的に適応していくんだけど、新井さんの実験結果を見ると、この読解力に関する問題の正解率は大学生だと国立大学系はほとんどが100点。早稲田、慶應あたりになると、それより下がる。つまり国立大学系はそういう論理的な能力が高い。読解力とは「わかる」ということですね。ここで、今度「ものはわかっていいか」という問題が出てくる。そうでしょ？ 国立大学を出た人間たちの倫理観を見れば一目瞭然です。文部省のお偉いさんも財務省のお偉いさんもみんな、誰よりも「ものがわかる」人間なんです。たとえば人殺しの犯人の心理がわかるとしたら、当人も人殺しですよ。倫理ってわからないこと、わかりたくないことと結びついているんです。中学生というのは、まさにそれが伸びていく段階にある。

——倫理的にはいわゆる読解力が伸びていくというのは、あまりよろしくない？

### ●大人予備軍として扱われる子どもたち

——30年前に『唯脳論』を書かれたころは、養老さんご自身も脳化する都市というものをまだ好意的に捉えられていたような気がします。しかし『遺言。』では「感覚」と「意識」の話もそうですが、危機感のほうが大きくなっているように思えます。

**養老** だっておかしな世界になっていますからね。トランプがおかしいと言われているけど、そうじゃなくて、トランプが生み出されるような状況がおかしいんです。EJ離脱もそう。ああいうことが国民投票で問われるようになっちゃうこと自体が変なの。

——脳化社会がデジタルネイチャーとなっていよいよ臨界点に到達してしまっただ。

**養老** いまスウェーデンが大変でしょ。ほうっておくと移民のほうが多くなっちゃうんですよ。スウェーデン自体消えちゃうという状況になって初めて、やっぱり問題を起こしている。ようするにナシヨナリズムですね。ナシヨナリズムも実質のナシヨナリズムであって、自分たちが伝統的に生きてきた、その生き方そのものが問われちゃっているんです。

さらに今度は日本が外国人労働者の受け入れを拡大しようとするよね。ようするにね、グローバル化するものとしていくときに「感情」と「理性」をどのぐらいのバランスで扱うかというのによく似ていて、それができるのを「成熟」と言う。だけど、いま「成熟」という言葉ぐらに使われなくなった言葉はない。成人式が荒れるのも、それが理由ですよ。大人になるってどういうことか、すでにわからない。子どもはみんな最初から大人予備軍になっちゃうから。

——たしかに今は子どもである時期から数十年後の大人であるときを意識させられ続けますね。

**養老** 子どもとしての幸せを奪われていると言ってもいい。一番大きな問題としては、小学生の自殺がある。これって最近起こった現象で、本来はないはずなんです。なぜなかったかというのを考えると、小学生が幸せだったんです。よく途上国へ行った人たちが、子どもたちがかわいって言うけど、当たり前なんだね。なぜかと言うと、子どもが死ぬから。子どもに死なれるというのは、親にとつてものすごく辛いことなんです。たとえばうちの父の母、父方の祖母は10人子どもがいたんだけど、自分が死んだときに元気で葬式に出られた子どもは4人です。半分先に死んでいる。七つとか、十とか、三つとかでもいいんだけど、

したら幸せかもしれない。

**養老** しかも、子どもってそんなに無理な注文を出すわけじゃないんですよ。1000万円かけてスポーツカー買ってこれと言わないよね。子どもをほんとに幸せそうに遊ばせるのは簡単なことなの。

——それが虫捕り。

**養老** そう（笑）。それをやらせないんだから。——やはりある種のグローバルズムというものが、いろいろな意味で子どもたちにも影響して、人間と社会と自然という、この三つのものとの関わり方が根本的に変わってしまったんでしょうか。

**養老** やっぱり都市化はひとりで進んでくるんです。そうすると都市でないものというのは必ずしも意識化されていないので忘れられる。意識されたものは次の代に受け継ぐことができる。だからどうしてもそっちが残って、どんどん肥大していくのが歴史だというふうに思っているんだけどね。

●毛虫と蝶は別の生き物？

虫の進化はわかっていない。

——人間の身体も都市と同じように必要な物が残ってきた

そういうときに子どもが死ぬと、あの子の人生っていったい何だったんだろうって必ず考える。

——自分の人生の中にその子の人生の初めと終わりがあるわけですからね。

**養老** そう。そういう経験をした親は、たとえば七つぐらいの子どもが遊んでいると、うちの子が生きていけばあの子の人生もいつ切れるかわからない。そうしたら、七つなりの人生を思う存分生きさせてやろうという気持ちになる。だから子どもが子どもらしく遊んでいるのを昔は評価したんですよ。「とんぼつり、今日はどこまで行ったやら」で。今はそうじゃないんです。当然生きるものと思っているから、将来のために子どもを大人にしているでしょう。

——10年後を見据えた幸せと言いだめるわけですね。

**養老** そうなの。だから僕らは逆に幸せだったんです。大人はうるさかったけど、それでも子どもが本気で遊んでいることに對してケチを付けなかった。

——それは貧困であろうが、戦争であろうが関係ないわけですね。

**養老** 子どもたちには関係ないです。だって生まれてきた状況が自然な状況なんだから。

——むしろ未来のために生きよと言われるよりは、もしかんでしょうか。たとえば原初からの記憶を宿した気管が残っていて、自然に触れることでそれが目覚めるというようなことはあるんでしょうか。

**養老** 動物の身体というのは建て増し、建て増しの古い旅館タイプなんです。リニューアルしているものであって建て直しはできない。だからどうしても必要なものは残っていて。手順として昔の構造を残すんですよ。たとえば魚の鼻の穴、これを鼻涙管というんだけど、それは人間の涙腺として残っている。この鼻涙管を先に作らないと、次の構造ができてこないという形になっているんです。だから、原初からの記憶を宿した気管というのは、当然残っています



魚の鼻涙管について、図を描いて説明してくれる養老先生

よね。

——ちなみに、虫の進化はどうなんですか。

**養老** 虫はね、進化は実はよくわかかっていなくてですね。いま、一番僕がおもしろいなと思ってる考え方は、毛虫と蝶は別な生き物だというやつ。

——毛虫と蝶がべつ???

**養老** だってね、考えられないですよ。毛虫は顎があつて葉っぱを嚙っている。蝶の口はストローですよ。どうやって嚙る顎をストローに変えるわけ？ これは変えられないです。トンボとヤゴはアブラムシを食つて同じです。同じ顎を上手に使う。蝶はそんなことはできないから完全変態と言つてサナギを作る。サナギの中で何が起こっているかという、実はとんでもないことが起こっているんです。

毛虫をつくっている細胞がありますよね。毛虫になるまでには、ご存じのように卵が細胞分裂して、いくつもの細胞になります。そのうちのほんの一部の細胞が実は残っているんです。これ、幼虫にならないんです。ただ細胞の塊で残っている。それで、この塊がサナギになったときにどんどん増えて、蝶を新たにつくる。幼虫はどうなるかと言え、全部溶けて栄養になっちゃいます。

——幼虫は関係なかったんですか。

**養老** 幼虫は成長剤。サナギと一緒にハチやハエを飼つて

に卵を産んでオスが来て精子をかける。だから精子がどこから来るかわかったもんじゃありません。

——ぜんぜん別の生き物が混ざつちやつたのかもしれないんだ。

**養老** われわれは万世一系とか言っているから(笑)。なぜこういうことがこれまで考えられなかったかと言うと、西洋人つて違うものが混ざるのが嫌いな。ダーウィンの『種の起源』という本で、一つだけ挿絵を描いているんです。それは系統樹。まさに木を描いている。この系統樹をご覧になるとよくわかるんだけど、完全に枝分かれのみで描いています。今の話は枝分かれじゃなく、枝と枝がくっついています。これ、許せないんですよ、彼らの考えでは。仏教的にはこのほうがいい。

——あまりにぶつ飛んだ話で、なんだか急にデジタルネイチャーとかどうでも良くなつてきてしまいました(笑)。やつぱりこういうことは単純に外に行つて、触れたり見たりしないとダメですね。

**養老** そうなんです。研究しちゃダメなんです。僕はただから今の人は生きてないと言ってます。生きるということとは自分が変わっていくということ。自分が変わるということとはもの感じ方が違つてくるということ。感じ方が違つてくると、世界が違つて見える。

おくと、それらがサナギに卵を産みつけて、中を食つちやつて、それこそハチやハエが出てくる。今はもう分化が進んじやつたからね。そんなことが起こるもつと前の時代には、これは何か別な生き物だったんじゃないかと。

——寄生虫と宿主にしている虫が1個の個体になつちやつたという感じなんですか。

**養老** そうそう。違う生き物が折り合つちやつた。それではないと不完全変態から完全変態がどう進化したかという説明ができないんですよ。なんでサナギつて、何もしい段階を進化の過程で作つて、どこが具合が良いのかという話。ジツとしていて、鳥に食われるだけで、何もメリットがないじゃないですか。

——何もないですね。

**養老** そう思つて生き物を見ていると、ウニもおかしい。ウニの幼生つてエビみたいに泳いでるんだよ。ところが、いつの間にか岩にくつついてトゲだらけになる。あんなもの違う生き物だよ。海産の生き物にはそういうものがたくさんある。ホヤがそうでしょ。ホヤはオタマジャクシ幼生と言つて、幼生時代はオタマジャクシのような形で泳いでいるんですよ。

なぜそんなことを言っているかと言うと、考えてください。海産の生き物つて体外受精なんです。メスが海の中

アートつて基本的にそういう意味を持つていると思う。われわれが見ているものと同じものを描いているわけでしょう。それを「あつ、こういうふうに見えるんだ」と気づかせてくれる。自分がそれを受け入れる感性があればその絵を見た瞬間に人生が変わるといふことはあり得るんだよね。

——意識が「同じ」ことを強要する社会のなかで、「アート」や「虫」などの記号化されないノイズに触れ、感覚で「違い」を感じ続け、生きる力を取戻さねばということでしょうか。

**養老** そうです。ノイズですよ。言ってみれば、説明できないやできないほど正しいんだよね。俳句なんかもそうだけど、理に落ちたら絶対おもしろくない。わからないものをわからないまま楽しむ。それは、日本人はよく知っていますよ。

●世界と自分がつながっている感覚のない子どもたち

——外に出て虫や魚や自然に触れるということでは今年3月に出版された『森里川海 大好き!』(環境省)という本の編集委員長をされていましたね。



**養老** これは環境省に頼まれた仕事ですね。そもそも環境省って大問題のお役所だと私は思っているんです（笑）。なぜかと言うと「環境」という言葉は自分を取り巻くものと定義されちゃう。すると自分と環境が対等に対峙する。ようするにね、環境庁ができたことで日本人は「環境」を意識し、その結果「自分」を得たんです。だから「オレがオレが」となる。それは世界と自分がつながっている感覚がないからです。私が子どもの頃は環境って言葉はなかったのね。つまり「環境」って言葉が一般化されることによって、日本人は逆に世界から切り離されちゃったわけですね。——逆に言えば、そんな環境省からこういう本が出たことは意味深いですね。

**養老** そうなんです。今や自分が世界の一部、自然の一部だと感じない人たちがなんてたくさんいる。世界で都市生活をしている人は八割になるらしいからね。釈迦が若いときの説話で「四門出遊」という話がある。釈迦が初めて城を出たとき、東西南北の四つの門をひとつずつ開ける。そこで彼は赤ん坊を見、病人を見、老人を見、死人を見、世の無常を感じて出家する。

これって実は現代の都市生活者のことですよ。今、大抵の人間は病院で生まれ、病院で死ぬ。つまり、仮退院が許されている病人ということ。僕が学生の頃の講義で教授は、僕は今年の夏にボルネオの山頂で5日間過ごしたんだけど、水道なんてないから雨水を飲んだ。だから僕の身体の一部にはボルネオの風土も入っている。そういうことを子どもたちに教えていますかってことです。その失われた感覚をわずかでも取り戻せたらという想いから作られたのがこの本です。

——単なるお勉強の本ではなく、児童文学作家の阿部夏丸さんが書かれた物語が、読んだ子どもたちを外に連れ出すためのフックになっているのが印象的でした。

**養老** 子どもには感覚から入れてあげないとね。五感から入ってきたものを頭のなかで消化し、さらに運動に変える。感覚と運動の間に脳がある。入れるだけはダメなんです。遠くにいたら小さく見えたものが、近くに行ったら大きくなるということを自分の運動と感覚で知る。これが脳を育てるんです。ところが学校は教室にじっと座らせているでしょう。生真面目に座っている子どもが褒められる。これは馬鹿になる（笑）。

外に行けば自動的に、視覚や聴覚や嗅覚から入ってきたものに対して自分が動かなければならなくなる。だから、昔の武士は「文武両道」と言っただけです。「文」は入ってくる情報、「武」は運動です。陽明学ではこれを「知行合一」と言った。



編著者：「森里川海大好き」編集委員会  
 発行所：環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム  
 発行日：2018年3月21日  
 版型：A5版ハードカバー／120ページ  
 \*この本は、環境省 Web サイトからダウンロードできます。下記のURLへアクセスしてPDFファイルをダウンロードしてください。  
<http://www.env.go.jp/nature/morisatokawaumi/dokuhon.html>  
 \*Amazon kindle、楽天kobo、Apple iBooksでも、電子書籍データを無料配布（平成31年3月31日まで）しています。

の最初の一言は「お産は病気じゃない」だったのね。今はお産は病気扱いですから。生まれるのも死ぬのも本来自然なことなんだけど、その感覚がおそらく消えちゃって、生まれてから自然ではないと思っている。それはやはり世界と自分が切り離されちゃったからです。

この本は、最初は細胞ひとつだった「自分」が成長して50キロ、60キロの肉体を持つ。それはどこから来たのか知ってまずかという話なんです。最近だとアメリカ産のグレイプフルーツとかニュージーランド産のキウイがスーパーで売ってます。それを食べるとみんなの一部になる。あるいは

子どもは遊んでそれを鍛える。そういう風景を最近では都内ではほとんど見ないでしょう。最近では服がぬれるのが嫌だからって海に入らない子どももいる。そういうふうにならなくていい。実はかなり危険な所まで来てしまっているんです。

——物語の中で子ども2人が大きくなった化け物うなぎを捕りに行くところなどはワクワクして、子どもの頃にザリガニを捕ったりしていたときのことを思い出しました。

**養老** 日本人が本来持っている感覚って世界と自分がつながっているってことが根本にあるんですよ。それを「土から生まれて土に帰る」と言っていた。都会にいとそれをどうしても忘れてしまっただけで、人間が作った世界のほうが中心になる。人間が作った世界は頭のなかです。頭のなかで遊ぶぶんなら、僕は「テレビゲームをやれ」って言う。僕もいまだにしょっちゅうゲームをやっています。ゲームは人間が作ったルールで人間が作った機械の中でやるから誰にも迷惑はかからない。だから一生懸命ゲームをやればいい。ただ、そうでない時間は外に出て世界に触れてほしい。そういうメッセージをなんとか伝えられなかなと思っただけです。

もうひとつは、今は世界が「意味」で出来ているでしょう。意味が無いものは無駄なものとして切り捨てられる。だから

ら「障害がある人間の人生に何の意味があるのか？」なんて馬鹿なことを言つて、19人もの人を殺すような人間までが現れる。でも、山や川や海に行けば意味のないものなんていっぱいある。ミミズの死骸やモグラの塚、変な形の石ころ、すべてが意味なんてない世界です。そういう世界を見ていけば、そもそもが「何の意味があるのか？」なんて馬鹿な質問はしない。だって、世界はそういうものなんだから。それすらもわからない人間の世界は、すごく貧しいと思うんです。

——やはりノイズが生きる力なんですな。

**養老** そうなんです。こういうのつて本来は文科省がやるべきことだと思っただけだね（笑）。やっぱり環境問題というのは簡単な話じゃないのでね。今日ずっと話してきたみたいに、人生とか、人が生きるとはどういうこととか、社会の成り立ちとか、あとは歴史の問題点、全部がそこに入っているわけです。そこから考えて、子どもたちからそれを考えてほしいなという。一応そういう体裁になつているけど、本当は先生や特に親に読んでもらいたい。子ども向けの本のふりをしてるけどね（笑）。

(2018・10・22 鎌倉にて)

◇構成／山下卓

## 養老孟司

——ようろう・たけし

1937年、神奈川県鎌倉市生まれ。解剖学者。東京大学医学部卒。東京大学名誉教授。虫採りが大好きで、採集した虫の標本作成にも力を注ぐ。主な著書にサントリー学術賞を受賞した『からだの見方』、毎日出版文化賞特別賞を受賞した『唯脳論』、そのほか『身体の文学史』『ハカの壁』『遺言』など多数。宮崎監督との対談集『虫眼とア二眼』もある。NPO法人「日本に健全な森をつくり直す委員会」委員長も務める。